―ヌグロホ・ノトスサントとインドネシア＝日本関係について―（1）

山　崎　　　功

Nugroho Notosusanto and Indonesia-Japan Relations (pt.1)

Isao YAMAZAKI

佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集　第4号
JOURNAL OF THE FACULTY OF ART & REGIONAL DESIGN
SAGA UNIVERSITY
NUMBER 4
March 2021

No. 4 (2021) 135～141

―ヌグロホ・ノトスサントとインドネシア＝日本関係について―（1）

山　﨑　　功

Nugroho Notosusanto and Indonesia-Japan Relations (pt.1)

Isao YAMAZAKI

要　旨

ヌグロホ・ノトスサントは、インドネシア共和国の教育文化相を務め、1985年6月3日、ジャカルタの自宅において急逝された。インドネシア歴史学界の長老的存在であり、アカデミズムと政治の間で、またインドネシアをとりまく日本や世界との関係のなかで、冷戦下の激動期におけるインドネシア現代史研究の当事者として、またスハルト政権下の教育文化行政のトップとして常に「火中の栗」を拾い、走り続けた。その評価をめぐっては、没後30余年を経ても論争が続いている。本稿は、筆者がその研究学徒として第一歩を踏み出したインドネシア研究、日本＝インドネシア関係研究の振り返りと反省をこめ、今後の研究を目指す研究ノートである。

ヌグロホ・ノトスサントは、インドネシア共和国の教育文化相を務め、1985年6月3日、ジャカルタの自宅において急逝された。インドネシア歴史学界の長老的存在であり、アカデミズムと政治の間で、またインドネシアをとりまく日本や世界との関係のなかで、冷戦下の激動期におけるインドネシア現代史研究の当事者として、またスハルト政権下の教育文化行政のトップとして常に「火中の栗」を拾い、走り続けた。その評価をめぐっては、没後30余年を経ても論争が続いている。

とりわけ、「アジアを変えたクーデター」とも呼ばれるインドネシアにおける1965年9月30日事件をめぐるスハルト政権の公式見解と欧米のインドネシア研究者を中心とした国際学界との対立は、ヌグロホ・ノトスサントを、国際的な論争の矢面に立たせることとなる。[1]同事件をインドネシア国軍内部の権力闘争ととらえたいわゆる「コーネルペーパー」（B.Anderson, R.T.McVey, “A Preliminary Analysis of the October 1 1965 Coup”, 1971）に対して当時のスハルト政権は激しく反発、インドネシア国軍史研究所のNugroho Notosusantoらが、同事件を共産党による計画的謀議

佐賀大学芸術地域デザイン学部　地域デザインコース
Course of Regional Design, Faculty of Art & Regional Design, Saga University

[1] 9月30日事件は、インドネシア国内の政治経済の流れ、あるいは村落社会の構造や勢力関係を大きく変えたのみならず、東南アジアの国際関係、ひいてはグローバル規模の冷戦構造にまで持続的かつ劇的な影響を与えたといわれている。事件直後、緊迫したインドネシア状勢理解のため、その歴史背景、社会文化事情をいち早く日本に紹介したひとりが増田与であった。（増田与『インドネシア』岩波新書　1966年）（田口三夫『アジアを変えたクーデター――インドネシア九・三〇事件と日本大使』1984年、宮城大蔵『戦後アジア秩序の模索と日本』2004年）また、この事件がなかったなら、強力で権威主義的なスハルトの開発独裁政権は誕生せず、その下での中央集権的な制度確立や統制も生じなかったとも指摘されている。

によるものだとする著作、公判記録などを公刊、以後、ヌグロホとコーネル大学を中心としたインドネシア研究者との間で激しい論争が続いてきた。これを以ってインドネシアにおける９月30日事件の公式見解と位置づけられてきた。（Nugroho Notosusanto, Ismail Saleh, *The Coup Attempt of the September 30 Movement in Indonesia,1968*）その後1998年スハルト退陣後にいたるまで数多くの９月30事件に関する著作がインドネシア内外で刊行されたが、一貫して欧米の研究者とインドネシア政府公式見解との溝は埋まることがなかったといえよう。また同時に９月30日事件の過酷な人権侵害問題の真相調査解明と和解に向けた地道な取り組みにも、半世紀を過ぎた今日も引き続き注視していかなければならない。（倉沢愛子『９・30　世界を震撼させた日━インドネシア政変の真相と波紋』岩波書店）同事件はインドネシア社会のみならず東南アジアおよびアジア太平洋地域に世界史規模の衝撃を与えたことは記憶されなければならない。

本稿は、筆者がその研究学徒として第一歩を踏み出したインドネシア研究、日本＝インドネシア関係研究の振り返りとして、まとめるノートである。

以下に、インドネシア郷土防衛義勇軍（Sekalera Tentera Pembela Tanah Air: PETA）研究をきっかけに、1970－1980年代日本＝インドネシア関係、さらには現代史論争にかかわることになるヌグロホ・ノトスサント関連の主な先行研究を示しておきたい。

McGregor, Katherine E. “Nugroho Notosusanto: The Legacy of a Historian in the Service of an Authoritarian Regime”, *Beginning to Remember: The Past in the Indonesian Present*, ed.by M. S. Zurbuchen, Singapore: Singapore Univ.Pr., 2005.

McGregor, Katherine E. *History in Uniform: Military Ideology and the Construction of Indonesia's Past*, Singapore: NUS Pr., 2007.

Notosusanto, Nugroho. *Hakekat Sedjarah dan Azas-Azas Methode Sedjarah*, Jakarta: Mega Bookstore, 1964.

Notosusanto, Nugroho. “Problems in the Study and Teaching of National History in Indonesia”, *Journal of Southeast Asian History*, Vol.6, Issue 1, 1965.

Notosusanto, Nugroho. *The PETA Army during the Japanese Occupation of Indonesia*, Tokyo: Waseda Univ. Pr., 1979.

Masuda, Ato, “Indonesian Scholar's Study of Peta Army”, *Japan Times*, March 23, 1979.

明石陽至 “Nugroho Notosusanto, *The PETA Army during the Japanese Occupation of Indonesia*, Tokyo: Waseda Univ. Pr., 1979”, 『東南アジア　―　歴史と文化　―』第９号，1980年

倉沢愛子「ヌグロホ・ノトスサント著『日本軍政期におけるインドネシア防衛義勇軍（Nugroho Notosusanto; The PETA Army during the Japanese Occupation of Indonesia, 1979)』『アジア経済』第20巻　第11号，1979年

後藤乾一『日本占領期インドネシア研究』龍渓書舎　1989年

増田　与『インドネシア学とその歴史　―これも「三十三年の夢」―』北樹出版　1989年

増田　与「インドネシア現代史の基本問題――ヌグロホ・ノトスサント助教授の最近の諸成果について――」『史観』第85号　1972年３月

増田与　後藤乾一　村井吉敬「インドネシアの1974年１月15日事件〔含関係資料〕」『社会科学討究』第19巻第３号　1974年４月

増田　与「インドネシアの文化面における民族主義」『社会科学討究』第22巻第３号　1977年５月

「戦後の日本とインドネシアの関係について――『鄒梓模コレクション』をめぐって」『社会科学討究』第24巻第３号　1979年３月

「一九八〇年代の日本・インドネシア関係――若干の問題点に触れた資料の紹介」『社会科学討究』第26巻　第３号　1981年８月

森本武志　『ジャワ防衛義勇軍史』　龍渓書舎　1992年

ガジャマダ大学のS. Soetrisno、インドネシア科学院のAsvi Warman Adamなど現地研究者の中には、スハルト時代の公定史観見直しの試みのなかで積極的な言論活動を行う動きも出ているが、政治環境の影響を直接間接に受け、国内外の先行研究の「注意深い」レビューを越えるものとはなっていない。

津田によれば、特定の一事例から歴史的定説全体の切り崩しを得意とするアスヴィの記述スタイルは、皮肉なことに、特定の事件・人物に焦点を当てそこに大いなる意味を見出すという点において、スハルト体制期に公定のナショナル・ヒストリーを作り上げたヌグロホ・ノトスサントのそれを彷彿とさせるという。そして、事後の必然性やそれに至る過程を目的論的に語るその語り口は、植民地支配への抵抗を必然的使命として活動した（とされる）国家英雄の語り口とも親和性が高く、それゆえにこそ、スハルト体制が構築した歴史の見直しを進めるはずの運動が、他でもない同体制下で定式化された国家英雄制度とも同居しうるのだ、と主張する。[2]

ヌグロホ・ノトスサントは1931年６月15日、インドネシア中部ジャワのレンバンで、ラデン・P・ノトスサント（1905 - 1979）の長男として生まれた。父ノトスサントはラデンの称号からもわかるようにジャワ族の伝統的な貴族であり、ジョクジャカルタのガジャマダ大学創立以来イスラーム法学の教授であった。ヌグロホと公私にわたり交友を深め、ヌグロホが推進したインドネシア＝日本学術交流を支え続けた増田与は、ヌグロホの精神世界の背景にあるレンバン地方の、「目に見えるオランダ植民地政庁の力よりも、目によって見ることの出来ない」、「村落の中の伝統的な神々や故郷の村社会の精神的力」の存在に注目した。ジャワ・レンバンの不可視的な精霊や東洋的な精神の力の存在は、ヌグロホの生まれた1930年代以降存在感を強めていった「北方のニッポン」、乃木希典や東郷平八郎の名前と結びついた少年時代のヌグロホの夢と結びついていったのではないかと指摘している。

ヌグロホはマランのヨーロッパ人小学校Europese Lagere School（E.L.S）に入学し、オランダ語による初等教育を受け、のち、日本軍成下ジャカルタ国民学校と名を変えたELSに移り、1944年に卒業。日本敗戦後は中学にすすみ、1947年卒業、さらに1951年に高校を終えているが、中学時代には日本軍政下中学で軍事教練を受け、さらに独立戦争がはじまると14歳にしてジョクジャカルタで人民治安団に参加、これが人民治安軍に改編されると、人民治安軍（Tentera Keamanan Rakjat）の生徒隊第17旅団に編入されたといわれる。多感な中学・高校時代における独立戦争経験は、ヌグロホの、「インドネシアの国軍は、外敵に対し国家を防衛するという機能を果たすだけでなく、国民の社会生活の安全を守るための政治的な機能をも果たしてゆくべきであるという」、「国軍二重機能論」への感性的な基礎をも提供しているともいわれる。[3]　以下に紹介する短編「河」は、高等学校『国語』教材としても掲載され、その存在が広く知られていながら、読み込む機会のあまりなかったものといえよう。ここに改めて翻訳紹介させていただくものである。

翻訳紹介　短編小説　ヌグロホ・ノトスサント「河」（Nugroho Notosusanto, “Sungai”）山﨑功仮訳

河を渡るたびに、カシム軍曹は心臓を締め付けるなにかを感じるのであった。それはあたかも彼の命そのものから、なにかを引き裂かれるような思いであった。そして渡る河が大きければ大きいほど、彼の内なる心はより強く揺さぶられるので

[2] 金子正徳、津田浩司「多面的な事実と創られ続ける過去－インドネシアの国家英雄をめぐるおもしろさ」『民博通信』No. 141、2013年、23頁

[3] 増田与『インドネシア額とその歴史――これも「三十三年の夢」』北樹出版　1989年　82－86頁

あった。

今まさにふたたび、ある河を渡ろうとしている。今回は、これまでのような小さな川ではない。中部ジャワでも最大級のスラユ河である。

カシム軍曹は、インドネシア国軍中隊第二小隊第三分隊長だ。ついに彼は西部ジャワ地域の作戦に復帰することになったのである。オランダ軍はすでにヨグヤを占領している。休戦協定はすでに破られ、共和国はもはや現状の取り決めに縛られることはないのである。

深夜1時をまわり、闇夜は暗く陰鬱で、あたりを弱い霧雨が、濡れるには十分に覆っていた。カシムは急で滑りやすい土手を、注意深く部下たちを率いて降っていった。彼はとりわけ慎重であった、なぜなら左に赤ん坊を抱えていたからである。右肩には機関銃を提げていた。鍛えられた眼でも、前を進む者のおぼろげな姿をとらえるのみ。視界の効かない兵士たちは、少しでも目印にするために、兵士たちはみな前を行く同僚の背中に着けた一片の光るきのこを頼りにすすんでいた。

10か月前の1948年2月、カシム軍曹はそのときもスラユ河を中隊とともに渡っていた。そのとき彼らは東に向かっていた。レンヴィル協定が調印され、インドネシア国軍は、オランダが事実上支配する地域のなかのポケット地帯に､「ヒジュラ」せざるを得ない状況にあったのである。兵士たちの多くは、妻子を伴っていた。

その当時、カシム軍曹は結婚して半年ほどであった。年若い妻はすでに5か月の身重であった。だが彼女は共和国支配地域へ夫について行かなければならなかった。カシムも一時はパガール　アグンの義理の親元に妻を預けることを考えた。しかしその時間的猶予もなく、妻アミナ自身も残ることを望まなかった。彼女は一途について行くことを望んだ。いったい誰が、子を身籠った女性のこのような一途な思いに抗することができようか。

ヨグヤに着いて2か月後、アチェップは生まれた。からだはとても小さいながら、眼は漆黒の鋭さを秘めている。髪の毛はプリアンガンの深い森の木々の様に豊かであった。だが母のアミナは我が子を産むのに、そのか細い最後の命を燃やし尽くしてしまった。アチェップを産んで1日後、肥立ちも悪くアミナは亡くなった。アチェップは軍病院の医師や看護婦らの懸命の看護の結果、その命を救われた。

この日、カシム軍曹は西ジャワに徒歩で戻ってきた。今やヨグヤ＝プリアンガン間は徒歩で結ばざるを得ない。輸送用のオランダのトラックもなく、乗り合わせる共和国の汽車もなかった。彼らは、300キロを超える距離を徒歩で進まざるを得なかったのである。谷を降り、山を登り、大小の河川を突き進んだ。遂に彼らはスラユ河畔に到達した。しかしバンジャルヌガラの山々の麓にはほど遠かった。橋はなく、渡し木もなかった。一行は水に入らざるを得なかった。

ゆっくりと注意深くカシム軍曹は険しい断崖を降りて行った。彼は対岸から吹き付ける山の冷気にがたがたと震えた。彼は背負い布に包まれたアチェップをくるむ二重の毛布を注意深く整えた。アチェップの瞳は空腹を満たしたい、乳を求める強い期待に満ちていた。だが、アチェップが動くたびに冷たい雨水がただその顔に打ち付け、したたり落ちるのみであった。

やがて、前方から指示が飛んだ。「分隊長集まれ」、口伝えに伝令がささやかれた。カシムは前面に出た。小隊長は第一分隊の前にすでに待機していた、彼らは、渡河についての指示を受けた。「情報部」によれば、敵軍は対岸を一個中隊で警備していた。河は浅瀬から腹に至る深さの部分まで警戒されていた。そのため、部隊はより下流で渡河せざるを得ない。水嵩は胸にまで届くおそれがあった。隊の前衛は、渡河のためのロープをすでに用意していた。

「何か質問は？」小隊長はいった。

質問を返す者はなかった。カシムは、雨でけぶりほの暗いなか、彼に向けられた隊長の眼差しを注視した。

「赤ん坊はどうかね」　隊長は尋ねた。

「眠っております、隊長」　彼は短く答えた。

「もし考えが変わったなら、子どもを後方の家族

に預ける時間がまだあるぞ」
カシムはすぐには答えなかった。ほんのひととき彼はカランボガの村長と住人に預けられた女性や子どもたちに思いをはせた。安全が確保されれば、女性や子どもらは村人らによって少人数ずつ渡河させることになるだろう。彼らは伝令による連絡を受け、河の対岸にいる分隊に出迎えられる手筈であった。

「カシム軍曹は残れ、他は解散」指揮官は静けさを破って命令した。ほかの分隊長らはそれぞれの部下のもとに戻っていった。

やがてカシムは指揮官のまなざしを感じた、それは自分と息子に向けられたものであった。カシムはその視線の意味がわかっていた。そう、彼にはわかっていたのである。ひとりの赤ん坊の泣き声が中隊全員の全滅を招くことをカシムはわかっているのか。その赤ん坊、わが子アチェップが戦士100人の命を危うくしかねないことを。それこそが指揮官のまなざしに秘められたことであった。

指揮官の眼は語っている、「Ｂ大隊の第３中隊のことを覚えているか、敵の奇襲で16名の兵士と家族10名の命を奪われたあのことを。あのとき単にひとりの赤ん坊が泣き声をあげただけにすぎなかったのに。ひとりの泣き声はほかの幼子へと次々に伝染していったのだ。

カシム軍曹は、下からおぼろげに聞こえる河の音に気付いた。平穏な夜の静寂が、銃声に破られるのを想像した。彼は中隊が河の中ほどで、なすすべもなくわなにかかり斃れていくさまに思いを致した。

まさにそのとき、アチェップが父の背負い布のなかで動いた。カシムは幼子が背負い布の奥深く頭をもぐりこませようとするのを感じた。父の懐へ、脇の下へ、より安心できる隠れ場所を求めるかのように。切ない感情の揺らぎがこみ上げ、カシムののどを締め付けた。母と触れ合う暇もなかったわが子。哺乳瓶しか知らぬわが子。父以外の家族を持たぬわが子。さらにこのうえ、ひとに預けねばならないのか？どのぐらい離れねばならぬのか？渡河のさなかに、見知らぬ者に連れ去られてしまいはせぬか？が子は無事でいられるのか？わが息子は、細やかな心のひだの奥底に秘めた唯一のなごみ、淑やかながらも気丈な妻の忘れ形見である。ガルートの両親にとっては何よりの贈り物、プグルアゲンにいる義父母にとっては、息子と亡き嫁のかたみであった。

カシム軍曹は、背負い布の息子をしっかりと抱きとめた。「息子を随伴させる許可を願います」カシムは言った。

「君は息子が泣かずにいることを約束できるか」

「神に誓って、泣きません」

「よろしい、気をつけたまえ」

「了解しました、隊長、ありがとうございます」

カシムの分隊の渡河の順番が来ると、カシムはさらに強く震えた。激しさを増した雨のせいばかりではなかった。脇を突き刺すように山から吹き降ろす冷たい風のためだけでもなかった。

背負い布のなかでアチェップの落ち着きがなくなり始め、カシムもまた震えた。浸み込んだ雨水が肌にまで達し、アチェップは濡れ、冷え切ったもどかしさからのがれようと体をくねらせた。

カシム軍曹は両岸に渡されたロープにつかまった。水が足を濡らし、ズボンに浸み込んだ。さらに上着の一部に及び、わが子を抱く背負い布をじわじわと濡らしていった。カシムは息子を抱えることも、銃を持つこともともに困難になってきた。次の瞬間、カシムは河の底にあいた穴に足をとられてしまった。強さを増した激流と風になすすべもなくもて遊ばれ、体の自由を失った。水は胸にまで及び、わが子は水に浸かった。まさにそのとき、アチェップは泣き出した。

アチェップは泣いた。声をあげて泣いた。

100を超える男たちの心の静寂が破られた。父の心は千々に切り刻まれ、苦しさに息もできないほどであった。

河の上流で、一発の照明弾が打ち上げられた。闇夜は一瞬にして昼の様に明るくなった。中隊の兵士はみな息ができなくなった。みなその場にくぎ付けになった。第一小隊はむこう側、第三小隊

はこちら側、そして第二小隊は河のど真ん中に立ち往生することになった。まさにその第二小隊の真ん中にいた父の胸で泣き始めたのであった。

ほどなくアチェップの泣き叫ぶ声はおさまった。一瞬ののち、すべてが消えてなくなった。静けさが大地に戻り、絶え間なく打ち鳴らされるイスラーム寺院の大太鼓のような心臓の重い鼓動が、その場の男たちすべての胸を圧倒した。上空に輝く照明弾は消え入ろうとしている。そして暗闇が再び谷あいの川面の空気を包み始めた。今は流れる河の波の音だけが聞こえ、川端の蛙たちの声が伴奏のように響いていた。

数分ののち、中隊は対岸の端にたどり着きやっとの一息をつくことができた。

あくる日、夜が明け始めるころ、敵の拠点からきわめて近いところではあったが中隊はしばし小休止をすることになった。一行はとある村に立ち寄った。

村長と多くの村人に案内され、中隊一行は村の端に集合した。そこで、簡素な式が行われた。アチェップの遺体が墓穴に降ろされた。ほどなく、できたばかりの小さな土まんじゅうに向かってひざまずき、肩を落とし、こうべを垂れるカシムの姿に、そこにいたすべてのまなざしが集まった。

ついに彼は立ち上がり、ためらいがちに周囲に眼をやった。その顔には、内に募った悲しみがありありと浮き彫りとなっている。ユニフォームはいまだ襟元まで濡れたままのようであった。

中隊長はカシムの顔をみつめ、歩み寄った。彼は両手でカシム軍曹の右手をしっかりと握りしめた。中隊長の眼は真っ赤に充血していた、それは寝不足だからというわけだけではなかった。何を話してよいのか、中隊長は、自らの息子をすすんで犠牲にしたナビ・イブラヒムの故事を思ったりもした。だが彼は言うべきことが何も浮かばなかった。

三〇分ほどのち、中隊一行は河の断崖に沿って続く丘陵を一列になって行軍し続けていた。陽はすでに高い。霞はすでに払われ、昨夜の雨で湿った大地は熱くなっている。

行軍する隊列のなかほどで、カシム軍曹は、肩のあたりに静かななにかを感じていた。地の底深く、谷の奥遠く、スラユ河のほんのかすかな流れが聞こえるような気がする。形容できない特別な感情が、いまカシム軍曹の胸の奥から、わきあがり、あふれだしていた。そして彼は歩き続けた。[4]

ヌグロホの理解者、友として、我が国の新たなインドネシア地域研究の先駆者のひとりとなった増田与は、パジャジャラン大学留学を終えて帰国、９月30日事件直後のインドネシアをいち早く日本に紹介した著書『インドネシア』のなかで、ヌグロホのインドネシア民衆社会理解につながる洞察を以下のように述べている。

> ・・・また、独立インドネシア行政の主人公は、植民地時代の民族社会のなかで支配者の地位を保持していた原住民理事州長官（レヘント）などの王権支配者層の子弟である。これら子弟は、特権的なオランダの高等教育をうけ、民族運動に参加しては指導者となり、独立達成とともに国家の支配的地位について、いわゆる選民的共和国支配層を形成してきた。家族主義（クカルアルガアン）の標語でむすびついた「二〇〇家族による選民支配」とよばれるものがこうして共和国に確立したのである。これら選良は、民族社会のなかでは、民族大家族主義を意味する家族主義の標語をもちいて、選良支配の実際を民衆の目のとどかないところにおいてきた。これらエリート支配層は、各種族の王侯、長老の子弟として、地方に代えれば、そのまま貴族地主であり、都市では、大臣、社長、大学教授、将軍、高級技術者といった地位を保障され、その兄弟、

[4] Sri Sutarni, Sukardi, tersusun oleh Haryono, Siti Isnatun M., *Bahasa Indonesia 2, SMA kelas XI*, Edisi pertama, cet.ke-1, 2008 (berdasarkan standar isi 2006)
Sungai | Karya Nugroho Notosusanto - FLP Cabang Maros (https://flp-maros.blogspot.com)など参照

子女、親類、縁者は、これと身分的隷従関係をむすんで、それぞれにふさわしい行政的地位を与えられてきた。インドネシアには、一定限度まで近代的概観をもった行政制度は存在し、その制度が、まがりなりにも、スカルノ大統領という頭首の下における共和国行政の一貫性を維持してきた。しかし、その制度のなかに生きていて、その制度そのものを支配しているのは、近代的な「法の支配」ではなくて、身分制社会に謂いている原則にちかいものであったといえよう。
共和国行政のなかに安定した原則がまだ導入されていないということが、この国が今日までたえず政治的動揺をひきおこしてきた一つの理由になっているようである。[5]

自らもラデンの称号を引き継ぐ家系でありながら、伝統的な身分制エリート社会に対抗し、土着の農村社会に根差したゲリラ戦のありように新体制の新たな方向を見出そうとしたヌグロホの思想理解の一助を示唆しているように思われる。

ただしその一方で、スハルト体制が確立していく流れの中で、その安定と発展を支える「民族史」・「インドネシア史」編纂に熱意をもって取り組もうとしていたヌグロホらの講演の様子を、当時インドネシアに留学していた土屋健治は次のように注意深く記している。

インドネシア大学文学部歴史学科で講師を勤めるかたわら、国軍史編纂委員会（Lembaga Sedjarah Pertahanan Keamanan）の委員長の任にある若い歴史学者ヌグロホは、「インドネシアの歴史家とインドネシア史」（Sedjarawan Indonesia dan Sedjarah Indonesia）と題するこの講演において、インドネシア民族が、何よりもまず、ひとつの民族として生活していきたいという主体的な意識によって構成されていることを強調し、スリウィジャヤ（Sriwidjaja）王国ともマジャパヒト王国とも質的に異なる強固な新たな民族国家インドネシア――それは、1945年の独立によって形成され、パンチャ・シラ(Pantja Sila)においてその民族のエトスを表明したとヌグロホは語っている――にふさわしい標準的なインドネシア史が、今こそ執筆されるべき時であり、それを行なうのがインドネシア史学者の責務であると述べていた。さらに彼は、この標準書の執筆こそ、1957年の第1回歴史学セミナーで定期されていた問題の一つの帰結であり、この執筆のために、ガジャマダ大学、インドネシア大学、バンドンのパジャジャラン大学（Universitas Padjadjaran）の歴史学者たちによって構成された委員会による共同作業が有効な手段として考えられると述べ、さらにこの民族史編纂委員会発足のための出発点として、第2回歴史学セミナーが近々開催されるべきではないかと述べて、彼の講演を結んでいた。ヌグロホが提起している第2回歴史学セミナーの具体的構想については明らかにされてはいないが、このままでいけば来年中にもこのセミナーがジョクジャカルタで開催されるのではないかと、歴史学科の一講師は語っていた。

その場合、第1にいかなる時代区分が、いかなる史料を基礎にして、いかなる方法論において行われるのか、また第2にヌグロホが述べている歴史学者による共同作業（共同執筆）の際には、もちろん徹底的な討論が前提とされなければならないが、それにしても個々の歴史学者の問題意識の相違は十分生かされるのか、すなわち、個々の歴史学者の研究の自由を保障することと、共同作業によって標準書を作成することとは、どのようにして両立しうるのか、結局官制の歴史が書かれるという恐れはないのか、・・・（1969年3月22日ジョクジャカルタにて）[6]

ヌグロホ・ノトスサントと日本（2）に続く

---

[5] 増田　与『インドネシア』岩波書店　1966年　78－9頁
[6] 土屋健治「ジョクジャカルタにて」『東南アジア研究』第7巻第1号　1969年6月　133－4頁